様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年 １０ 月 １８ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３１７０

研究課題名（和文）フランク人におけるエトノス生成：起源伝承とクロノロジーを視座として

研究課題名（英文）Ethnogenesis of the Franks: from the view points of origin legend and of chronology

研究代表者
佐藤　彰一（Sato, Shoichi）

名古屋大学・高等研究院・名誉教授

研究者番号：８０１３１１２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の課題での研究成果を、一冊の著書として短期間のうちにまとめることができた。著書の表題は『フランク史１.クローヴィス以前』であり、名古屋大学出版会から総ページ数400頁の著書として出版された。この書物は3部立てで、第一部「起源の地を求めて」と題して、全４章で、先史時代からローマ初期までのゲルマニア世界を東地中海世界との交渉と琥珀取引に焦点を当てて論じた。第二部は「フランク同盟の盛衰」と題して、全３章をあてて、第三部が「フン族の影の下で」と題し、３章を費やして、カタラウヌムの闘いまでフン族に支配のもとにおかれたフランク集団の様相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究によって、一般にゲルマン民族と称されている「民族」の先史時代の様相を、一つには彼らの活動が青銅器時代まで遡る東地中海世界との交渉が明らかになったことと、「北の黄金」と称された琥珀取引にフランク同名の核となったブルクテリー族が関わっていて、２世紀中頃のマルコマンニ戦争の渦中で、その主戦場となったパンノニアで、同盟の形成がなされたことを明らかにした。後のメロヴィング朝の開祖になったキルデリクス一世は、フン族の服属下に入り、フン滅亡のけいきとなったカタラウヌムの戦いの後、ガリアに帰還し、フランク人を束ね他のであり、彼は通説で言われるサリー・フランク族ではなく、ライン・フランク人であった。

研究成果の概要（英文）：I could integrate all of my research activities on the subject for which I had been allowed the grant-in-aid, into a book whose title shall be "The History of the Franks 1: Before Clovis". This coming book will be counted about 400 pages including the list of cited bibliographies, 1200 of notes, and index part. The book is consisted of 3 parts and of 10 chapters in all. The titles of those parts are as follow: "In search of the land of origin", with 4 chapters, "Rise and fall of the Frankish unions", with 3 chapters, and "Under the shadow of the Huns" with 3 chapters.

研究分野：西洋中世初期史

キーワード：青銅器時代後期　北東ヨーロッパ　先史時代研究　琥珀交易　ブルクテリー族　西ローマ帝国の崩壊　キルデリクス一世　世界システム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1.　研究開始当初の背景
研究開始時点では、フランク族の出自に関して、もっぱらタキトゥスの『ゲルマーニア』の記述をもとにした議論に終始していて、ここからはフランク族の出自（もっともこれはひとつの部族というより、政治的団体の性格が濃厚であったのだが）についての明瞭な姿を浮かび上がらせることができていなかった。

２．研究の目的
こうした研究の現状を打破し、この部族団体が出現したゲルマニアおよびバルト世界を西暦前 1000 年頃までに遡り、この青銅器後期時代からこの世界を分析することで、この歴史的集団出現の文化的、社会経済的、政治的背景を探ろうと試みた。

３．研究の方法
文字史料としては、ゲルマン社会研究の素材として、ヘロドトゥスのような一部の古代ギリシアの著作家の記述の検討はなされたものの、広範というのにほど遠いものであった。この面での史料利用を広げること、そして何よりも考古学的発掘調査の成果を存分に活用することであった。とくに歴史学と先史学の古典的な区別を取り払って思考し、作業することを心がけた。

４．研究成果
議論を紀元前一二〇〇年頃の後期青銅器時代から説き起こした。さらに言えば、この時代に起こった世界システムの崩壊から開始した。このシステムの崩壊後に生まれた西ユーラシアの世界が、現在まで続く社会体制の基盤をなしていると思われたからである。西ユーラシア大陸の西端に位置する西ヨーロッパは、地中海世界に比べてその初期史、つまりギリシア、ローマの影響が及ぶ時期までは人々の関心の埒外に置かれるのが通例である。そのため我々は文字で書かれた記録を欠いた時代まで足を踏み入れることにした。もっとも古代ギリシア人が北方の「スキタイ世界」として北西ヨーロッパを記述しているので完全な先史時代と称することはできないのだが。

フランク同盟の初期史には不明な部分が多い、というよりもむしろ確実なことはほとんど分からないと言ったほうが正確であろう。我々の結論としては、もともとゲルマニアのリッペ川上流域に定住していたブルクテリー族を中心として、カマーウィ、カットゥアリア、ウィスビー、アムスウァリ、トゥバントなどの部族が結集して形成した「政治」集団で、その名称が示唆するように、ローマの支配に屈するのを潔しとしない「自由」を理念として掲げた集団であった。中核となったブルクテリー族は、西暦九年のトイトブルグの森の戦いにも参加し、殲滅したローマの三軍団の鷲の軍章のひとつを奪った部族であり、筋金入りの反ローマ部族であった。だが西暦九七年に、カマーウィを含む近隣の部族の襲撃を受けて壊滅状態になり、居住地を追われたとされる。

ブルクテリー族は、ヴェンスクスによれば北方領域から地中海地域、さらに近東にまでネットワークを広げていたバルト海の琥珀交易に手を初めていた。バルト海から北海沿岸を航行しての海上交易ばかりでなく、ゲルマニア内陸部にもネットワークは形成されていたから、ブルクテリーの壊滅は、彼らがその一翼を担い、富裕化したことが近隣部族の妬みをかった末の悲運であったと推測される。バルト海とその周辺の琥珀は東地中海や近東にも

古くから輸出され、トロイ戦争以前のミケーネの遺跡からも出土している。ちなみにバルト地方から東地中海地方への輸出は、南ロシアから黒海沿岸経由で行われたらしく、ミケーネの度量衡システムはスカンジナヴィアや中央ヨーロッパと一体化していて、レバント度量衡システムが同期するキプロス、スペイン、ブリティン、アイルランドなどの地中海・北大西洋システムとは異質のもののようである。

ドナウ川中流のパンノニアのカルヌントゥムに駐屯する第一五軍団の兵士たちが西暦六八年に東プロイセンに現れて、ローマ側からの琥珀交易への積極的な提案が示され、ウィッスワ川をルートとして、カルヌントゥムへの「琥珀街道」、いわゆる東ルートが確立され、地中海地方への最も盛んな販路が確立した。マリア・ギンプタスによれば、東プロイセン、西および中央リトゥアニア、そして西ラトヴィアへのローマ帝国からの輸入品の増加は印象的であり、三世紀の墓地でローマ貨幣が見つからない墓はないと言ってよいほどの、琥珀輸出による繁栄状態であった。まさしく琥珀は「北方の黄金」であった。

一七二年に開始したマルコマンニ戦争はパンノニア地方が焦点となったが、この時期に琥珀交易を中心とした経済活動がドナウ・ゲルマン諸族だけでなく、西ゲルマン諸部族の分裂集団を引きつけていた。元来琥珀交易に携わって富を得ていたブルクテリー族も、原住地を追われたこともありそうした移動してきた部族のひとつであったと想定される。そしてこの地で彼らが中核となってフランク同盟が結成されたと考えるのである。だがこの同盟の特徴は、緩やかな連帯という以上のものではなく、同盟全体を覆う独自の大王権を創出するものではなかった。「フランク同盟」という傘の下で、多くの小集団となってゲルマン世界、あるいは帝国の周縁部に小王的指導者のもとで定着し、また移動したのである。キルデリクスの系統にあたる祖先も、やがて三世紀の初頭にパンノニア南部からドナウ川の右岸沿いに西に移動し、ライン川の左岸を中流まで下り、一時川沿いに定着した後に、ライン川を東に越えてテューリンゲン地方に入った。

そしてキルデリクスの父クロディオの時代に、北ガリアのトゥルネに拠点を得たのであった。その後、クロディオがアエティウスとの戦いで斃れた後に、おそらくテューリンゲンの拠点に留まってアッティラの人質になってしまった兄キルデリクスと、父に従ってトゥルネに住んでいた弟との後継者争いが、弟の兄への反逆という形で勃発した。だが、名前不詳の弟は、フン族の勢力とローマの勢力がぶつかったカタラウヌムの戦いで戦死し、兄キルデリクスは敗北者側におかれたが、直後のアッティラの死とそれに続くフン帝国の崩壊によって解放され、血統上正当な後継者としてトゥルネに帰還したのであった。そして一時期テューリンゲンへの亡命を余儀なくされたが、東帝国宮廷の支援もあって、ガリアに復帰することができた。テューリンゲン王妃バシナとは森鴎外『舞姫』もどきのロマンスの果てに正式に結婚し、おそらく四六七年にクローヴィスが生まれた。バシナは推測するに複数存在した王妃のひとりでしかなかったと思われる。フン族的な環境に置かれたはずのテューリンゲン王族が、アッティラ的な「一夫多妻」的習慣から無縁であったとする理由はない。キルデリクスは、トゥルネがその管轄下にあった第二ベルギカ州の正式な属州長官として、またこの管区の「王 rex」として、四八二年に他界した。トゥムルス型の墳丘墓の建設構想に一五歳のクローヴィスがどれほど関与したかは不明である。

このようにキルデリクスまでのフランク同盟の歴史を総括したわけであるが、我々の見方がこれまでの通説的理解と大きく異なるのは、キルデリクス・クローヴィスの系統は、一般に受け入れられているようにトクサンドリアに定着したいわゆるサリー族の系統には属していないという点である。あるいは、キルデリクス・クローヴィスの系統をサリー族とするならば、この系統は、ライン川河口地帯からブラバント地方に勢力を拡張した、そしてユリアヌス帝に奉仕したフランク同盟ではなく、ライン川の東から到来した一団であったという点である。この点については、イギリスのメロヴィング朝史の権威イアン・ウッドが一九九四年に著わした定評あるメロヴィング朝史において、実にさり気なく「東から到来した

フランク同盟」の可能性があると指摘している。さらにこれより四〇年前の一九五四年にオランダの歴史家 W. J. デ・ボーネが『フランク同盟、その最初の活動からキルデリクスの死まで』において、帝政初期に一部はライン左岸に移住させられたが、一部はライン川の東に留まりエルベ川まで領有していたとし、残っていたその一部が、キルデリクスを長とするフランク集団であったと力説している。そして部族としては、それがカエサルの時代まで遡る「シカンブリ族」であったと主張していた。クローヴィスがカトリック・キリスト教の洗礼を受けた折、司式したランス大司教聖レミギウスがクローヴィスに「シカンブリ族よ、静かに頸を下げよ」と呼びかけたのは、レトリックではなく、クローヴィスのフランク同盟の中での部族帰属を認識していた者の言葉であったとするのである。我々はこの説を受け入れるべきであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 佐藤彰一	４．巻 １１
２．論文標題 Johannes PREISER-KAPELLER, Jenseits vom Rom und Karl dem Grossen . Aspekte der globalen Verflechtung in der langen Spatantike, 300-800 n. Chr.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 西洋中世研究	６．最初と最後の頁 186 / 187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Sato Shoichi	４．巻 No. 2
２．論文標題 Words of silence or silence in words: Essays the deconstruction of Historiarum Libri Deem by Gregory of Tours	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Spicilegium (online Journal)	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤　彰一	４．巻 10巻
２．論文標題 Sylvain Gougeheim, La Gloire des Grecs. Sur certains apports culturels de Byzance a l'Europe romane (Xe-debut du XIIIe siecle.	５．発行年 2018年
３．雑誌名 西洋中世研究	６．最初と最後の頁 238-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤　彰一	４．巻 10巻
２．論文標題 Jean-Marie Moeglin / Stephane Pequignot, Diplomatie et les relations internationales au Moyen Age (IXe-XVe siecle).	５．発行年 2018年
３．雑誌名 西洋中世研究	６．最初と最後の頁 249-249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐藤　彰一	4．巻 10巻
2．論文標題 Helene Vu Thanh, Devenir Japonais. La mission jesuite au Japon (1549-1614)	5．発行年 2018年
3．雑誌名 西洋中世研究	6．最初と最後の頁 253-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐藤彰一	4．巻 9
2．論文標題 Jacques Dalarun, La Vie retrouvee de Francois d'Assise	5．発行年 2017年
3．雑誌名 西洋中世研究	6．最初と最後の頁 176, 177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤彰一	4．巻 9
2．論文標題 Masaki Taguchi, Konigliche Gerichtsbarkeit und regionale Konfliktbeilegung im deutschen Spatmittelalter: Die Regierungszeit Ludwigs des Bayern (1314-1347)	5．発行年 2017年
3．雑誌名 西洋中世研究	6．最初と最後の頁 194, 194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　3件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Shoichi Sato
2．発表標題 L’idee japonaise de (l’histoire occidentale) sous l'ere Meiji
3．学会等名 L'Academie des Inscriptions et Belles-Lettres. Rentree solennelle 29 nov. 2019 sous la Coupole de l’Institut de France en habit vert.（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Shoichi Sato
２．発表標題 Comment evaluait-on les exploits guerriers au XIVe siecle ? : le Japon et l ' Europe.
３．学会等名 L ' Academie Royale de Belgique, Bruxelles, le 2 decembre 2019.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shoichi Sato
２．発表標題 Abeille ou Cigale ? : A propos du contexte culturel de l ' insigne dit “ Abeille ” decouvert dans la sepulture de Childeric ler.
３．学会等名 Seminaire du Moyen Age, l ' Universite libre de Bruxelles, le 3 decembre 2019.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤彰一
２．発表標題 琥珀とゲルマン人
３．学会等名 日本学士院例会報告
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 佐藤彰一	４．発行年 2019年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 266
３．書名 歴史探究のヨーロッパー修道制を駆逐する啓蒙主義	

１．著者名 佐藤彰一	４．発行年 2018年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 262
３．書名 宣教のヨーロッパ　ー大航海時代のイエズス会と托鉢修道会ー	

１．著者名 佐藤彰一	４．発行年 2017年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 278
３．書名 剣と清貧のヨーロッパー中世の騎士修道会と托鉢修道会ー	

１．著者名 佐藤彰一	４．発行年 2021年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 400
３．書名 フランク史 1，クローヴィス以前	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Words of silence or silence in words
spicilegium.net/02_sato.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関